

NO 限りなき山行

写真・文
近藤和美

LIMIT

イスモイルソモニ峰登高の途次、背後にはいつもコルジェネフスカヤ峰(7105 m)の雄姿がある

新連載

日本勤労者山岳連盟創立 60 周年をひかえ新連載をはじめます。
近藤和美さんは 1970 年代以後、アジア・南北アメリカの 6000 m を超える山に延べ 79 回遠征。84 年から 91 年にかけて当時のソ連領 7000m 峰全 5 座を完登して「雪豹」称号を得たほか、92 年以後はヒマラヤ 8000m 峰に延べ 24 回の遠征経験を持ち、全 14 座に足跡を印している現役登山家です。労山名誉会員で、海外委員としても長年貢献されました。

今月号から本誌の貴重なページをいただくことになった。10年近く前までは各種山岳誌に寄稿する機会も多かったのだが、近年は出番もめっきり減り、私を知らない人も多いのではなからうか。

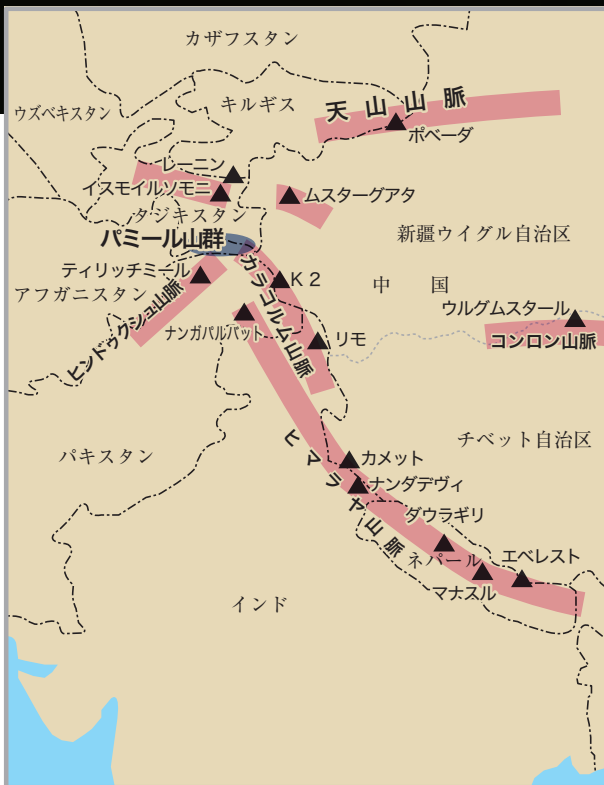
60年間の登山経験の中で、過去の寄稿は登山記録、遠征報告、登山技術解説などテーマをしぼった単発ものが多かった。古い話から最近の出来事まで、経験したこと、遭遇した事件など様々あるが、それらをどう取舍選択して語っていけるのか、不安もあるが、ともあれお付き合いいただきたい。

ヘリコプター機上から望んだレーニン峰(7134m)北面。その高度の割には登攀的要素の少ない穏やかな山容である

中央アジアの高峰(1)

登山を愛好する人なら誰でも、南アジアに位置するヒマラヤやカラコルムの山々を知らぬ人はいないだろう。最高峰のエベレストや第2位のK2など、地上最高の8000m峰14座はすべてそこにある。ただ、それらの高峻山脈とは別に、それより北の、ユー

ラシア大陸の内奥にも6000m級の高峰がそびえる山域がある。それらは主にパミール山群と天山山脈に分かれ、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの旧ソ連領域にまたがり、一部は中国新疆ウイグル自治区にも分布している。



【パミール山群】

パミールはよくパミール高原と表現されるが、ヒマラヤ同様、れっきとした高峻山岳地帯である。もちろん山麓には高原地帯もあるが、それはヒマラヤも同様である。

主要部分はタジキスタン領内に含まれ、一部はキルギスにもまたがっている。

最高峰はイスマイルソモニ(7495m)で、モスクビン氷河を挟んでコルジェネフスカヤ(7105m)と対峙し、共にタジク領内にある。第2位のレーニン(7134m)は少し離れてタジクとキルギスの国境上に位置する。

限りなき山行



コルジェネフスカヤ峰側から仰ぐイスモイルソモニ峰（旧名コムニズム7495m）北面。旧ソ連領パミールの最高峰にふさわしい威容を誇っている

1980年代を中心とした前後約20年間、当時のソ連スポーツ委員会（登山部門）はパミールを舞台に国際登山キャンプを主催していた。東欧圏だけでなく、欧米諸国からも多くの登山隊が訪れ、80年代末からは天山山脈も解禁され、一番乗りを狙って多くの登山隊が集結した。

ネパールやパキスタンと比べて同程度の標高の山に割安な費用で挑めたこと、そしてBCへの入山やBC相互間の移動にも（今にして思えば採算を度外視したような）ヘリコプターの頻回運用で短い日数で遠征できる利点から、かなりの人気を博し、日本からも大勢の登山者が入った。

筆者は50代になってから初挑戦した8000m峰に60歳を過ぎても無酸素で挑み続けたが、40代に通い続けたパミール・天山での登山で培った経験がその大きな基礎になった。



ハンテングリ側から望むポベータ峰（7439 m）北面。天山山脈の最高峰らしい堂々たる山容である。その背後は中国新疆ウイグル自治区になる



天山山脈第二の高峰ハンテングリ（7010 m）は大理石で構成された秀麗なピラミッドだ

【天山山脈】

天山はシルクロード紀行などにもよく登場するので中国（新疆ウイグル）の山というイメージを持つ人も多いが、高峰が群集する中央天山は、その新疆とキルギスにまたがり、一部はカザフにも分布している。

最高峰はキルギス・新疆国境のポベータ（7439m）で、南イニリチェク氷河を挟んで北側にハンテングリ（7010m）のピラミッドがそびえ、これはキルギス・カザフ国境ともなっている。

れなくなり、現在では若干忘れられかけた存在となっているように見えるのは残念に思う。

そんなわけで、この連載は私にとってなじみ深い旧ソ連側のパミールと天山にある高峰、7000 m 峰5座について写真で紹介することから始めてみたい。

しかし1991年末のソ連解体以後、各登山キャンプは独立各国の政府機関や民間運営となつて、費用の割安感が薄れ、また、たまたまその前後からネパールもパキスタンもルートに1パーティーに限っていた登山許可を事実上無制限に発給するように変わっていったこと、さらにそれらの国の登山トレッキング代理店も外国隊受け入れに習熟していったこと、それらが相まって、パミール、天山登山の有利性、簡便性が薄れた故か、日本からもかつてほど訪問されなくなり、現在では若干忘れられかけた存在となっているように見えるのは残念に思う。



ドゥシャンベ途上からパミール・プラトーを俯瞰する
前方左は秀峰モスクワ（6785m）

中央アジアの高峰〈2〉 パミール最高峰 イスモイル・ソモニ概説

本誌好評連載中の大蔵喜福君の「アドベンチャー・トラベル」では前号まで昨夏のレーニン登山行の顛末が書かれている。今もレーニン・キャンプが大変盛況な様子が伺えて何よりだ。

ただ、入山しやすいキルギス側からのレーニンはともかく、魅力あふれるタジキスタン領のパミール核心部への訪問者は少ないようだ。そこで本稿では、タジクの高峰紹介から始めてみたい。

2人の仲間と共にパミールの7000m峰3座を一挙に制覇してやろうと意気込んで出かけた。当然、最高峰のこの山が最大目標だったのだが、天候の巡りあわせや隊員の体調を勘案して取り付くのを諦め、コルジェネフスカヤとレーニンの2座登頂のみに終わった。とはいえ、BC以上での期間24日間での7000m峰2座登頂は悪くはない成果だった。

私がパミールに通ったのはソ連時代の1984、86、88年およびタジキスタンが独立してからの96年の計4回になる。そのうちイスモイル・ソモニに手を付けたのは86年と88年、96年の3度だが、登れたのは86年だけ。最初の訪問である84年夏、私は

ただし、この時に最高峰に登り残したことが2年後の再訪を決意させ、ひいては後のち天山にまで通うことになるという、言わば運命的(?)な断念となったと言える。

ソ連時代、ソ連の登山家は、自

NO LIMIT

限りなき山行

②

写真・文 近藤和美



国領内の高峰群、パミール、天山などで腕を磨き、その結果、主だった峰々には稜と壁とを問わず、四方八方からルートが拓かれた。イスモイル・ソモニも例外ではなく、20本前後のルートがある。

その中で、現在では通常ルート化しているのが今回紹介するパロートキン・ルートで、19

68年にユーリ・パロートキン率いる隊によって初登攀された。イスモイル・ソモニは北西面中腹にパミール（フィルン）プラトーと呼ばれる平均標高6000mの広大な氷河台地を抱えていて、それがルートの上半と下半を分けている。

スタートはモスクビン氷河とワリテル氷河の合流点内側に位置するモスクビンBC（4200m）で、ここへはソ連時代にはレーニン北面のアチクタシBCからヘリコプターで飛び、タジキスタン時代になった96年には同国首都のドゥシャンベからヘリで入った。

BCからワリテル氷河に出で左岸側に移り数時間遡ると、プラトーから切れ落ちてきている大氷壁を避けて右斜上していける雪壁が現れる。これをたどって行くときキャンプに好適な平地（5050m）に登り着き、ここはC1によい。

限りなき山行



コルジェネフスカヤが見下ろすC1

C1からはキーロフ峰の東峰ともいうべき小ピークの近くから落ちてきている雪壁状の丸っこい雪稜をひたすら登る。極端に手こずる箇所はないが、所どころセラックやクレパスもあり、

夏も進むと表層の雪が解けて青氷の斜面も現れるので熟成した氷雪技術は必要だ。

ようやくキーロフ東峰の左肩の稜上に飛び出すと、眼下にパミールプラトーの大氷原が広がっていて壮観である。少し稜を左へ下って行き、プラトーに容易に下りて行ける緩斜面を選んでプラトーに下り立つ。

イスモイル・ソモニの西の肩をなす、首都と同名のドウシャンベに突き上がる、これまた丸っこい雪稜の基部付近に向かって歩を進めると、そこがC2地点(6050m)となるが、長い1日だ。

C2からはドウシャンベ(6956m)への雪壁となる。難度は高くないが、高度差が大きく、標高も上がるので苦しい登高が続く。

ようやく登り着いたドウシャンベのスノードーム上はC3(最終キャンプ)には絶好だ。

翌朝未明に頂上攻撃に出発。初めは小コルまで雪稜を緩く下る。

少し先で稜は岩壁となつて立ちはだかるので、左手の雪壁に移り、これを左斜上する。傾斜は45度くらいはあり、プラトーまで1000m余の

高度感もあいまって決して安易には登れない。私が登った33年前の夏は4人パーティーだったが、バケツが作れる程度の好条件だったので互いを信頼してロープは出さなかったが、行かれる方には最新状況の把握を勧めたい。

雪壁左上を終えて北稜上に飛び出すと、後は容易な雪稜をしばしで待望の絶頂に到達する。頂上はあまり広くない。

下りでは北稜からC3への下り返りは細心の注意を払いたい。バロートキン・ルートは総じて登攀的要素を強いられることは少ないが、何といっても7500mという高度とそれがもたらす山の格は7000mそこそこの山とは比較にならない。私



北稜に向かって急峻な雪壁を斜上

も最初の訪問時には取り付かなかつたわけだが、実際過去にも多くの日本隊が「パミールは易しい」などといった誤った言説を安易に信じてこの山を目標に出かけながらも、結果はコルジェカレーニン登頂に甘んずるか、あるいはそれさえも失敗という結果に終わっている例をいっぱい見知っている。

決して侮らず、万全の体力・技術、そして的確な高度順応戦術で臨めば、登った！という充実感に浸れること請け合いの山でもある。

もう新ルートを拓く余地は少ないが、日本人未踏のルートも数多い。



中央アジアの高峰〈3〉

コルジェネフスカヤ概説

からピリニーまで歩いて下った。

ピリニーから真上にそびえるコルジェネフスカヤに向かつて初めは急な細い涸れ沢を落石に気を付けながら登りつめる。

支稜上の小コルに飛び出すと、そこからは左の主尾根の右側面を斜上して行くが、右下の谷の上部には氷河の末端部が仰がれ、だんだんその谷底に近づいて遡上するようになる。

氷河末端を右にやり過ごしてさらに登ると、小規模なサイドモレーン上に導かれ、何張り分かのテントスペースが整地されていてC1となる(5000m)。

3回目の訪問はその10年後のこと、すでにソ連体制ではなくなっていて、ドゥシャンベからヘリで直接入ったモスクビン

旧ソ連領パミール第3高峰のコルジェネフスカヤ(7105m)はモスクビンBCの北方にそびえ、南のイスモイル・ソモニと相対している。通常ルートであるツェトリン・ルートを紹介するが、前号所載の概念図も参照されたい。

私は1984、86、96年の3度登頂しているが、10年の間を置いて登山したことで、受け入れ体制や気候の変動も感じた。そんな点にも触れてみたい。

初訪問はソ連時代で、レーニン北麓のアチクタシBCからヘリでフォルタンベックBCに運ばれた後、再度ヘリでの小飛行でモスクビン氷河下流域右岸のピリニー(4100m)に下ろされた。

また、2回目の時はアチクタシからモスクビンBCへ飛び、そこ

限りなき山行

3

写真・文 近藤和美



C1 からルートは岩壁基部に向かい、さらに右上の南稜コルへ



C1 ~ C2 間の小プラトーからアバラコフやモスクワなどの主脈を望む

ではないが、下りにはロープを用いるのが無難だろう。

この氷瀑地帯を抜けていったん小プラトー状になった後、再び傾斜が急になって氷雪壁となる。頭上に迫る黒々とした大岩壁の最下部に向かつてこれを登りきると傾斜が緩み、岩壁直下に着く(58

数十年來の高峰通いの経験から、温暖化の影響は北半球では南を向いている側の融雪量の増加に顕著に現れているのを実感しているが、これもその一例だ。

南稜上に出る直下の急登を経て小コルに出る(6100m)と、そこは雪を整地すればテント敷

BCの運営も民間団体数社の共同管理になっていた。

低地からいきなり4000m余のBCに入るのは高度の影響を受けやすいので、出来れば日本で富士山頂上宿泊を1~2回でもやってみたいところだ。

また、入山後はBC背後のリッジ上やモスクビン氷河源頭のチエティーレで初期順応するの

もよいだろう。

コルジェへの取り付きルートにも変化があり、いちいちピリニーまで下って行くことなく、BCから氷河を渡ってすぐコルジェの山肌に取り付く効率的なトレールが拓かれていて、これを左上へ左上へとたどって行く。途中には数カ所岩場の乗っ越しもあるが難しいものではない。

行く手に氷河の舌端が近づき、その少し下を崩壊した氷塊の散乱を見ながら素早く通過するとかつてのピリニーからのルートと合流する。

C1からは氷河に移るのでここから高所靴・アイゼン装着となる。谷はいったん傾斜を増して小規模なアイスフォール状となる。すごく難しいというわけ

00m)。そこは岩壁基部が大きくオーバーハングしていて上部からの落下物から保護されていてC2地に良い(私の2回目は体調万全だったので、ここを唯一のハイキャンプとしてBCから実質2日間で頂上を往復した)。

C2から岩壁右の氷雪壁を斜上。最大傾斜60度を含む直登や横断で支稜に出ると、コルジェ南稜へと続く氷雪壁の長い右斜登となる。実は1、2回目は、こ

こは急ではあっても雪壁状だったので特にロープも出さずに素早く登降できたが、10年の時を挟んだ3回目はここが蒼氷混じりの氷雪壁と化していた。直登よりもトラバースは厄介で固定ロープ必須となっていた。



オーバーハングした岩壁基部のC2



南稜コル先の岩場の登攀



南稜コルからC2への冰雪壁の下降
トラバース



登頂を終えて南稜を下降する

張りは張れ、筆者の1回目にはここをアタックキャンプとして頂上を往復した。
コルからすぐ先で直立した岩場が現れる。Ⅲ級程度と難しくはないがロープを仕掛ける。
後は氷雪稜が続く、二つほどコブを越え、と小雪原に出て絶好のC3地点となる(6300m)。
翌日は頂上アタックだ。雪稜登高が続くが、右側には雪庇^{せっぴ}が出ている箇所があり踏み抜かないように、また降雪後には雪崩れる箇所もあるので要注意だ。メンバの技量によってはロープ確保が無難な急雪壁やクレバースも混在する。
いくつかの小ピークを越えつ

つひたすら雪稜を登る。
いよいよ頂上が近づくとその右下をトラバースして頂稜に出、わずかに折り返すと絶頂だ。
山頂付近の岩はイスモイル・ソモ二同様、堆積岩質の頁岩^{けつがん}か粘板岩で構成されており、ユーラシア大陸の内奥に位置するこの高山帯の地盤が太古には海底にあったことを想起させ、大自然の営みの悠久さに思いを馳せさせられる。
過去の日本隊もほとんどはこのルートから登っているが、96年には松本正城氏らのペアが東面から登っている。その他、西面や北面にも既登ルートがある。



NO LIMIT

限りなき山行

[4]

写真・文 近藤和美

中央アジアの高峰〈4〉

レーニン峰概説

旧ソ連領パミール第2高峰のレーニン(7134m)はイスマイルソモニの東北東、およそ100km離れてキルギスとタジキスタンの国境をなして東西に延びるザアライ山脈の主峰としてそびえている。タジク側ではシノと改称された由(田村俊介氏提供情報)だが、一般には今もピーク・レーニンで通っている。

南北両面から数多いルートが拓かれているが、アプローチの容易な北面、キルギス側から多く登られており、私も1980年代に3度訪れ、いずれも北側から登頂している。

クや隣国ウズベキスタンのタシケント起点もある。日本からの空路の兼ね合いもあり、都合の良い集合場所を選ばれたい。

前2回で紹介したモスクビンもそうだが、地の利の良いアチクタシは食堂、サウナ、通信設備、休養娯楽室などがいっそう充実している。

北面のメイン登山口はアチクタシBC(3700m)で、ここへは車道が通じており、夏にはキルギス登山協会や民営ガイド会社が開催する一大キャンプ村となる。英文ネット検索で条件の合う会社を選んで申し込む方法が簡便だ。一般的にはキルギス第2の都市オシ(オーシユ)集合解散が多いが、首都ビシケ

レーニンは写真でも分かるように非常に穏やかな山容をしており、ほとんどのルートが登攀的要素は少なく、テクニカルなルートを好む人には向いていない。逆に言えば世界で最も登り易い7000m峰だと思うので、高峰初心者が7000mの高度を経験するには好適な対象であろう。一番よく登られているのはスケッチ図で10のラズジェリナヤ



アチクタシからレーニン山頂を望む（ソ連時代のBC風景）



クレバスも大きな口を開けている

び合って行動したい。
5400m 辺りから斜面は反り上がるように傾斜を強め、真っ直ぐ行けば北壁直登ルートだ（12）。ここは右へ転じて水平にトラバースして行ける緩斜面をたどると中華鍋の底のような地形のC1地に

6400m 付近は平坦に近い小広い地形で、ここに最終キャンプを置く隊もある。
6800m 辺りまで来ると傾斜が緩んで広い雪のスロープをたどるようになるが、忍耐を要する登りだ。左手は北壁へ急峻に切れ落ちていく。また右手後方遠くにはイスモイルソモニなどパミールの核心山群も望まれる。



レーニン山頂を仰ぎながら北斜面に入っていく

（以下ラズと略す）ルートで、これを解説したい。

BCから南の空にそびえるレーニンに向かって出発。しばらくは色とりどりの高山植物が咲き乱れる草原の中の道を進む。中国語ではパミールを葱嶺と表すが、ネギの原種らしいものも混じる。途中まで車で送られることもあるが、緩い登りを続けると探検家の峠（4200m）と呼ばれる乗っ越しに出る。反対側の斜面を下りトラバースして行き、レーニンから流下するレーニン氷河の上に上がる。平坦に近い氷河上を延々とた

どると右から支氷河が出合う。かつてはこの辺りがC1だったが、現在はBCを運営する団体がここにABCを置き、アチクタシほどではないが、食事提供やテントの用意などもしてくれる。ここまで有料で騾馬による荷役サービスもある。標高は4500m 程度で登山の見地からは本来ここがBCでもよい位置関係にあるので、ここを基地として上部への行動を展開すれば日程短縮を図れる。

ABCからはレーニン北面の大斜面の登高になる。傾斜はかなり緩いが大小のクレバスが走っ

着く（通称フライパン）。C1を後に雪壁を登ってラズ峰から北に延びる尾根に上がり込む。緩く起伏する広い雪稜だが、ラズ峰に迫ると傾斜が強まる。

ザアライ山脈主脈と接続するドーム状のラズ峰（6148m）直下にC2が置ける。頂上で左折し、眼下のコルまで100m 弱下るとそこはC2地によい。頂上まで高度差1000m 余を残すが、私はいつもここからアタックした。

C2から西稜の登高を開始。急斜面と緩斜面、平坦地が交互に現れ、急な部分では露岩が出た箇所もある。

NO LIMIT

限りなき山行

レーニンから
イスモイルソ
モニ、コルジェ
ネフスカヤを
望む



西稜 6400 m
付近の登高



ラズジェリナヤの科尔から西稜を仰ぐ

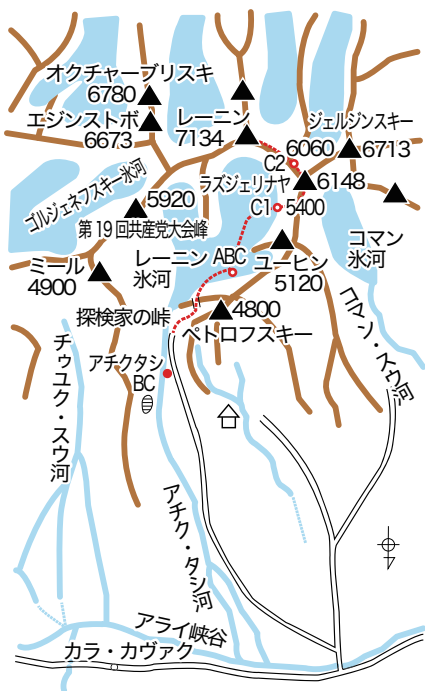
このほか
のルートで
は13のスク
ラトフ・
化がありそ
うで勧めら
れる。90年
には林雅樹
氏が8の
リプキン稜
を登り、私

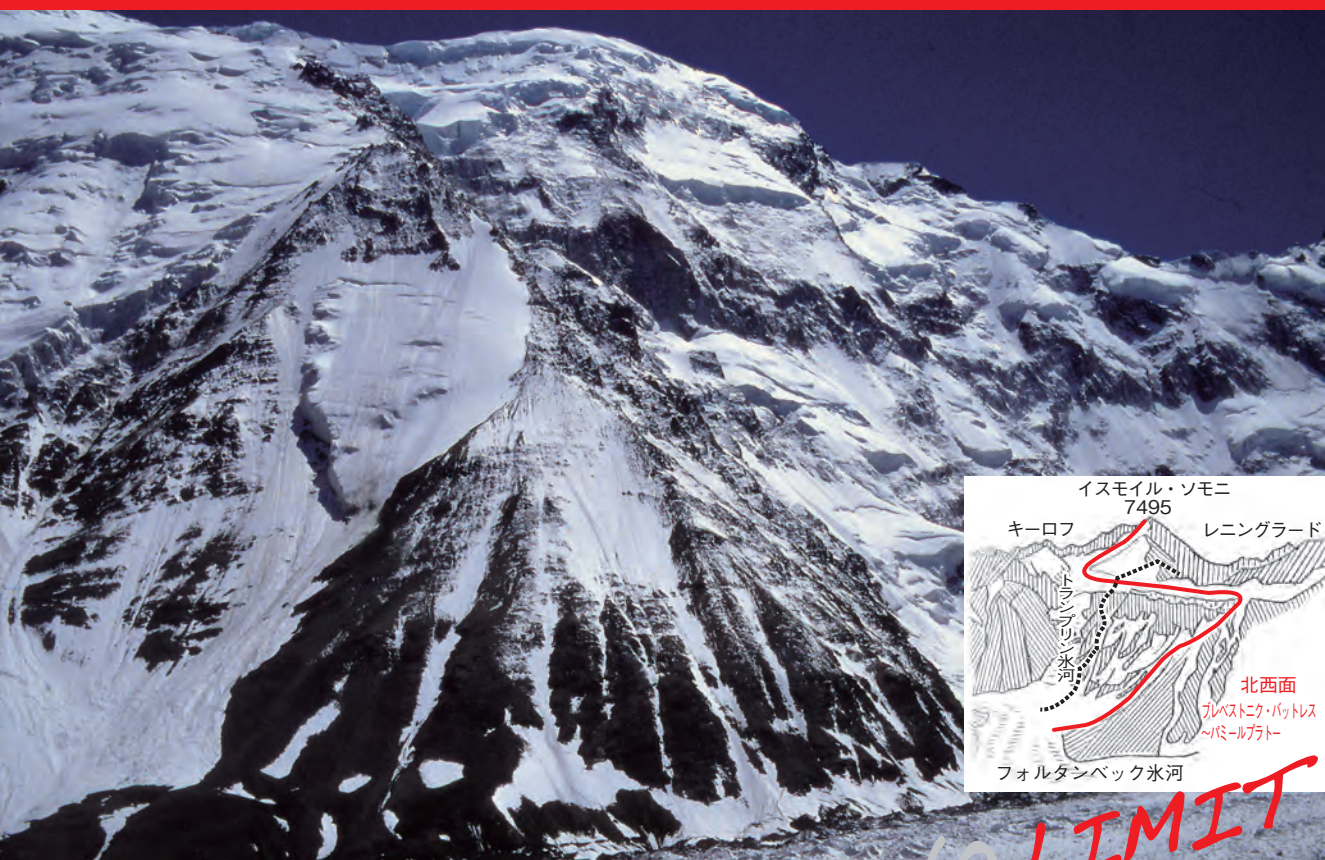
長かった西稜の登りがついに終わると山頂だ。露出している岩塊の上には今も革命家レーニンの大きな胸像が設置されている。通常ここが山頂とされているが、実は頂上は広く浅い楕円形の皿を伏せたような地形をしていて、レーニン像はその北の縁に当たり、最高点は南側の先の方にある。実際往復してみるとかなり時間を要し、私は最初の時はそこまで行つたが、以後はレーニン像の所で登頂とした。

西稜はとにかく広い地形なので下山時に視界を奪われると迷う恐れがある。十分注意したい。

は2度目の時に全装備を背負つてラズ・ルートから登頂後、東稜（これもだだっ広い）を下ってスクラトフ・ルート上部に入り、途中から9に移つてABCへ下るといふ縦走登山をアルパインスタイルで果たした。登攀的要素の少ない山でも登り方次第で充実した登山が出来よう。

なお、モスクビンに入山してヘリでレーニン南面の登山口へ運んでくれるサービスをしているガイド会社もある。それを利用すればタジキスタン内でパミール三山ワンシーズン制覇も企てられる。





ブレベストニク・バットレス全景

限りなき山行

[5]

写真・文 近藤和美

中央アジアの高峰〈5〉

ブレベストニク・バットレス・ルート

前号まで旧ソ連領パミールの3大峰について、それぞれの通常ルートを概説してきた。

今回は、イスマイルソモニ（以下ソモニ）へのバリエーション、ブレベストニク・バットレス（以下ブレ）を概説したい。

なお、2月号で掲載した地図を再掲するが、一部表記を変更しているので留意されたい。

ブレ・ルートはフォルタンベック氷河中流域左岸にあるスロエバBCから取り付く。ここは私が通っていたところはフォルタンベックBCと称されていたが、時にモスクビンBCも同名で呼ばれることがあったそうで、混同を避けるためにスロエバBCと呼ぶことになったという。

実はソ連時代にはソモニへの通常ルートのサブ的な存在として少なからぬ隊が登降していて、私も88年、記念すべき第1回登山高所登山学校隊を率いた際に、このルートを採用した。

もっとも、ソ連解体後、旧ソ連圏各国の登山家たちがそれぞれ商業登山隊を公募するようになると、採算上ソモニ、コルジェのどちらにも近くて便利なモスクビンBCに集客を一本化させ、スロエバBCは運営されなくなってしまった。

ソ連時代にはブレ・ルートもソ連登山家たちが自らも登頂を目指しつつルート整備を担っていたので、他国からの登山者は自らがルート工作をする必要が



盛況だったソ連時代のスロエバBC。対岸にトランプリン氷河が流下し、時々崩落する



ブレ・ルートの登攀

の上流) 源頭部のクルプスカヤも中期順応に良いだろう(88年に我々も取り付いたが、降雪のため敗退した)。
ブレ・ルートへはBCからはほぼ真向かいに位置するルート基部を目指して氷河を横断。初め

あまりなかった。
だが現在は、スロエバBCは入域も不便になり、この登路も人影まばらな現況という。しかし、それだけに既存の整備されたルートに飽き足らないクライマーには、今はむしろ格好の対象になるのではないだろうか。
なお、BC背後のホワイトストーン峰は初期高度順応に好適だし、トゥラミス氷河(フォ

は砂礫^{されき}の斜面をたどるが、次第に急になり、岩の要素が多くなってくる。
やがて本格的な岩稜となり、所どころ小岩壁も混じる。アルパイン・スタイルでなければ固定ロープも必要になってくる。古いロープが残っているようが、不用意に頼らずに攀^よじりたい。途中のピナクルを回り込む辺りは高度感も出て、クライマーには爽快感満点だろう。
ひとしきり岩場を登った後、傾斜が緩んで雪面主体に変わってくると間もなくC1地(5200m)だ。
この後は、所どころ岩場も現れるが概ね左を巻いて行く。
ぐっと緩くなってくると間もなくバミール・プラトー(PP)につながる雪稜となり、頭上にレニングラード峰が迫る。
さらに進むとPP西端のC2(5800m)地に到着するが、ソモニ頂上はまだ遠い。
ここからはおよそ10kmにおよぶPPの縦断だが、トレールが

なければ、独力でラッセルして行くことになる。88年にはまさにそういった状況だった。

PPは平坦^{へいたん}に見えるが、実際は東西両側がわずかに高い。PP上の氷雪は両側から中央に向かって緩やかに流動し、トランプリン氷河が唯一の捌け口^{はぐち}となつて流下していく。その落ち口に向かってPP上には半同心円状にクレバスが走っており(2月号トップ写真参照)、通過には注意が必要だ。

ここを過ぎて緩い登りに転じ、やがてバロートキン・ルートと合流するC3地に到達する。PPの縦断分だけバロ・ルートより1日多く要することになる。

ブレ・ルートを登った後、下りは往路を戻るか、88年の時(受講者の技量不揃^{ふぞろ}いで6700mまでで敗退)に採ったのだが、バロ・ルートを下る縦走形式も採用できる。

ここで重要なことは、スロエバBCに限らず、他の山、他の壁面に取り付くにも同様だが、B



私が今回最新事情を
収集する上で頼りに出
来たのはK2アドベン
チャーという会社で、
こちらからの色々な問
い合わせにその都度迅
速に応答してくれた。
本拠はロシアのオムス
ク市にあるが、中央ア
ジア諸国での遠征手配
にも相互ネットワーク
があるので問題ないと
のことだった。ウェブ
サイトを覗いても丁寧
なページ作りと見受け

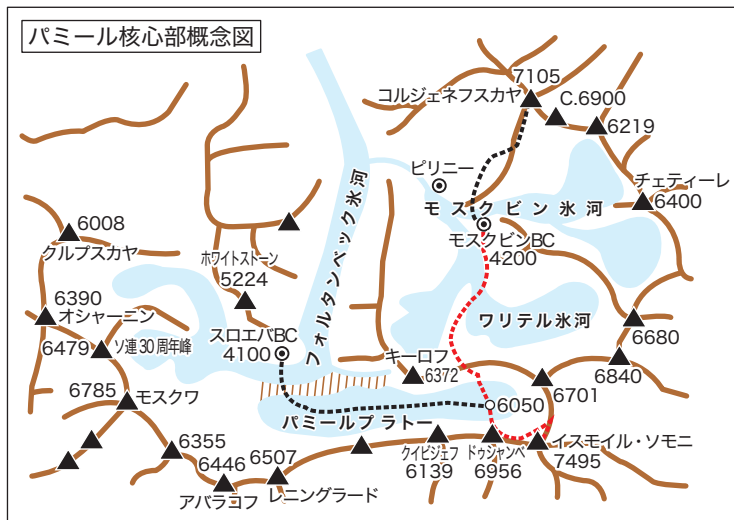
Cへの輸送手段である。ヒマラヤでも事情は同じだが、入山するには現地エージェントの手を借りるのは必然となる。

モスクビンB Cなら夏の一定期間、チャーター・ヘリ運航がなされるが、スロエバにはない。

モスクビンから軽装なら1日で行けようが、重荷ならそうはいかない、やはり現地代理店にヘリを依頼するのが一般的になる。

られるので、ヘリの相談に限らず推奨できる一社ではないかと思う（連絡先は欄外参照）。

もちろん、送金を伴う手配依頼には不安も付きまとうのがネット予約の常。そこは自己責任でお願いしたい。やり取りは英文になるので不得手な方は国内代理店に仲介を依頼されるのが無理かと思う。





モスクワ（左）、ソ連 30 周年記念峰、オシャーニン（右）の連峰北面



南西パミールの雄、カール・マルクス峰
(角張嘉孝氏提供)

NO LIMIT

限りなき山行

6

写真・文 近藤和美

中央アジアの高峰（6）

パミール その他の山々

前回まで旧ソ連領パミールの3大峰について紹介してきた。7000mを超える山に人氣が集中するのはある意味当然だが、パミールにはそれら以外にも魅力的な山座が多数存在する。今回はそのいくつかを紹介したい。

初めに、パミールの山々のほとんどが属しているタジキスタンについてざっと述べてみよう。世界地図帳を参照されたいが、同国の国土は、私なりに言うなら、蝶が羽を開いたような形をしていてパミールの高山帯の大半はその右の羽（東半分）にほぼ分布していると表現すれば理解してもらえるだろう。

その右羽の北縁にキルギスとの国境をなすザライ山脈が横たわり、レーニン峰はそこにあ

ザアライ山脈東部に位置する
クルンディ山塊



パミール中央部に悠然たる佇まいを見せる
イスティクロール峰（角張嘉孝氏提供）



る。一方、そこから南へ約300 km隔たった南縁、アフガニスタンのワハン回廊に接する南西パミールには6700 mを超えるカール・マルクス峰を擁するシャクダラ山脈があり、その近傍には6510 mのエンゲルス峰も

ある。

その南北縁の間には最高峰イスマイル・ソモニを盟主とする科学アカデミー山脈をはじめとして高山山脈が幾重にも重なっている。前々号、前号所載の地図も合わせて参照されたいが、今号に掲載した略地図は主要な目立つ山を位置付けしたもので、それ以外にも氷雪をまとった山は無数にあり、未だ探検的要素を帯びた登山・踏査対象として登山家・探検家を待っている。

私の経験値ではすべては解説できないが、いくつか紹介しよう。まずザアライ山脈ではレーニン峰西隣のジェルジンスキー峰（6713 m）が高い。しかし私が気になるのはレーニンのはるか東、タジクからキルギスへと抜けるパミール国際道路がザアライ山脈を越えるキジアルト峠のさらに東に位置する一群の山塊、クルンディで、日本の登山者はまだ訪れたことがないのではなからうか。

目を中北部に転ずると、ソモニ

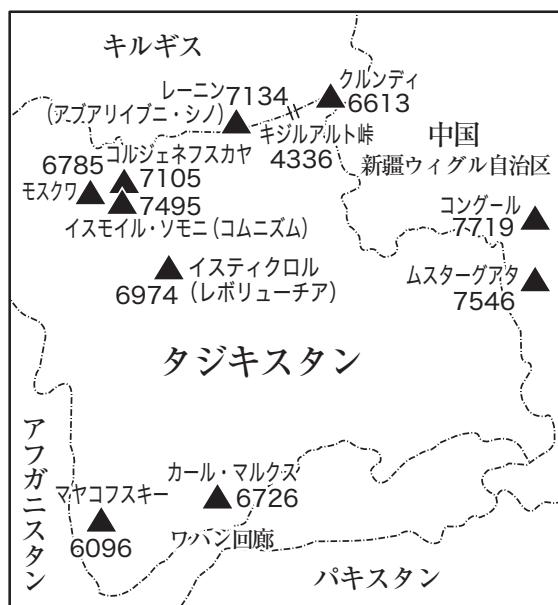
から西に延びるピョートル1世山脈上のモスクワ峰がある。これは前号で触れたスロエバBCの真向かいに位置し、右へソ連30周年記念峰、オシヤーニン峰と高度を減じながらも続いている。特にモスクワは急峻な北壁を正面にして美しくそびえ、クライマーの挑戦を待っている。

なお、タジキスタンではソ連時代の政治がらみの地名・山名がかなり改称されており、それは今後も続くと思われるので山座同定時には留意されたい。

さて、パミールはネパール辺りと比べるとかなり高緯度に位置し、氷河が発達している。中でもフェドチェンコ氷河は流程77 km、極圏を除けば世界最長の氷河で、ソモニから東に発出する氷河もこれの支流に当たる。

そのフェド氷河の源頭部に悠然と端座するのが7000 mには僅かに足りないが、タジク第4位のイスティクロール（旧名レボリユーチア＝革命）峰で、フェド氷河はそこから北へと直線的

限りなき山行



ムスターグアタ 右の緩やかな斜面が登路となる
左は北峰 7184 m



ムスターグアタ登高途上から望まれるコングール連峰

に流れ下る。今回掲載する同峰の貴重な写真は、新潟大山岳部OBで元静岡大教授（森林生態学）、近年は森林再生のNPO活動の傍ら、タジキスタンを足繁く踏査し、13年には69歳にして南西パミールのマヤコフスキー峰にアルパイン・スタイルで登頂された角張嘉孝さんからお借りしたものだ、風格のある山容だ。

ところで、パミールはタジクの東、中国・新疆ウイグル自治区にも分布している。そこは崑崙山脈の西の果てと分類されるが、氷山の父として名高いムスターグアタには私も01年にパキスタンからクンジュラ峠を越えるアプローチで入山した。通常ルートの西斜面を最終キャンプまで上がったが、風雪に阻まれて登頂を逸した。それにしてもこの西面ルートはレーニン以上に緩やかで技術的には世界で最も容易な7500m峰だと思われる。ただし、この山も2005年に平出和也・谷口けいペアによって東稜を登攀後、通

常ルートをスキーで下るといの特筆的登山も実践されている。

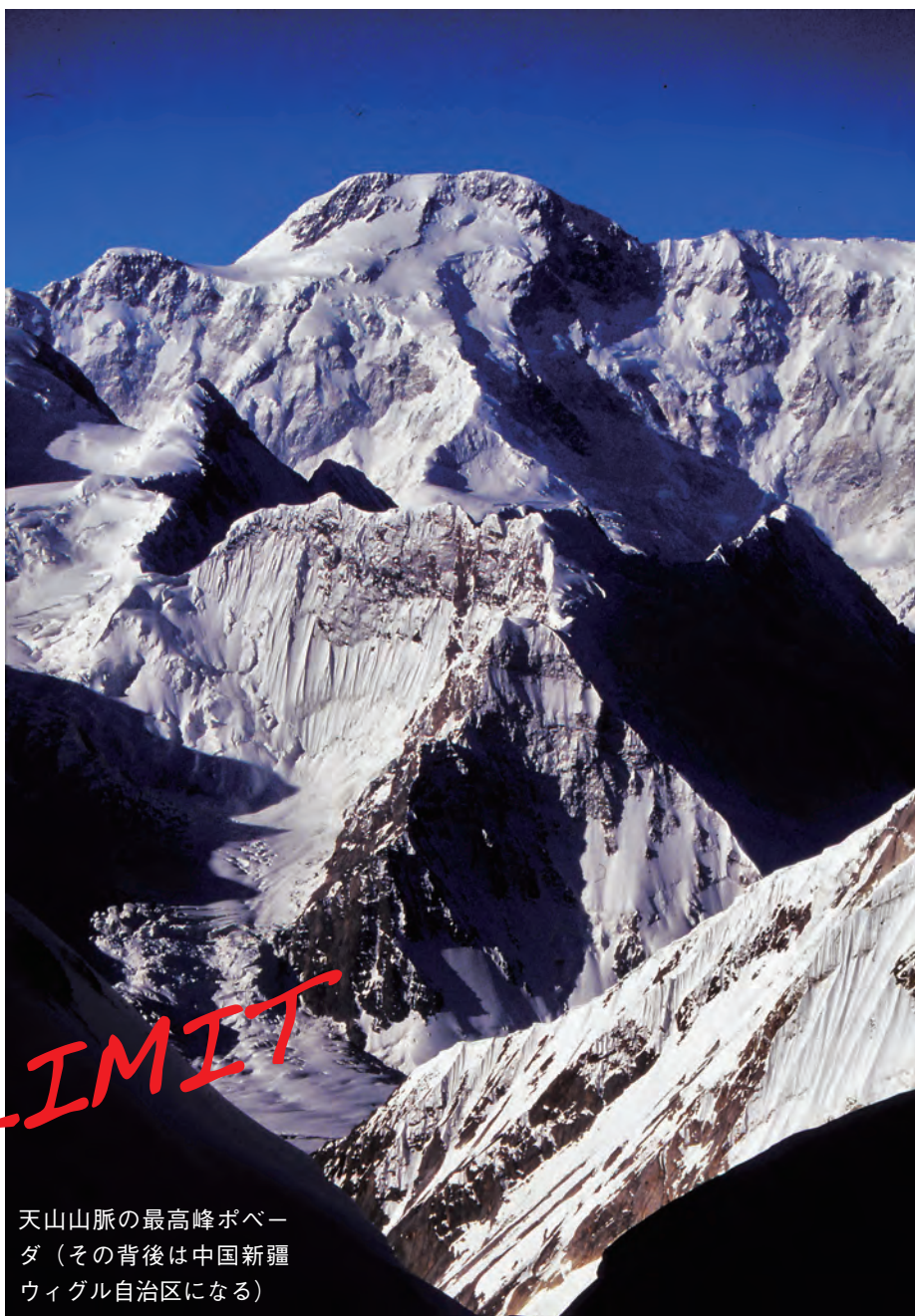
このムスターグアタの北方には7700mもの高峰、コングール山群が構えている。西峰とも言うべきコングールチュビエも標高7530mを誇り、馬蹄形をした長い山稜上には7000mを超える高点をいくつも抱えている。ただ、総じて中国領パミールは、標高が高いが山容は穏やかで、そびえ立つという感じではない。

最後に、この地のアプローチを含めた情報の入手先についていくつか紹介したい。

一つは4月号で触れた田村俊介さんのパミール中央アジア研究会。二つ目は日本山岳会の中村保さんが手掛けておられる電子版英字情報誌「Asian Alpine E-News」である。これまでに51号がアップロードされており、うち3回ほどはレーニンとザアライ山脈のガイド特集が編まれている。（共にURLは欄外参照）

中央アジアの高峰⑦ 天山山脈・中央天山概説

写真・文 近藤和美



天山山脈の最高峰ポペーダ（その背後は中国新疆ウイグル自治区になる）

前回までパミールの山々について概説してきたが、今回からはユーラシア大陸の奥深く、さらに北に横たわるもう一つの高山地帯である天山山脈について述べてゆきたい。

天山山脈と聞くとシルクロードとの関連で中国の山というイメージを持たれる人が多いのではないだろうか。もちろん間違っていないが、登山の見地からすると、むしろ国境の北側、旧ソ連圏の方がなじみ深い。

天山はそのまま読めばテンザンかテンサンだが、私は現地発音（ティエンシヤン）に近い「テンシヤン」と呼びならわしている。

語源はトルコ系古語のテングリ・ターグからきており、文字通り、天を突く山々といった意味である。

NO LIMIT

限りなき山行



天山山脈は東西2000 km余りにも及ぶとされ、その東部には新疆ウイグル自治区領内のボゴダ(5445 m、81年京都山岳会隊初登頂)がある。

また、西部ではカザフスタンとキルギスの国境地帯に幾筋かに分かれて延びるアラタウの諸連峰があり、こちらも4000～5000 mの峰々が連なっており氷河を抱いている。

しかし、中央アジアの高峰と云うからには、ここでは6000～7000 m級の高峰が蟄集する天山山脈中央部について紹介したい。とは言っても、長大な天山山脈の中で中央天山と呼ぶべき部分は限定的で、東西200 km内外である。

掲載した地図はソ連時代のロシア語のものなので判読は難しいが、概括的な地理把握には適しているので採用してみた。

図中、紫で表されているのが国境線で、中央天山はキルギス、カザフスタン、中国(新疆)の3カ国が国境を接している地帯

であることがお分かりだろう。

図の右端寄りで南北に伸びているのが国境ともなっている子午線連峰で、これを幹として大別して3本の山脈が東西両側に長い枝のように延びている。旧ソ連側で見ると北からサリジャス連峰、テングリ・ターグ連峰、コクシャルタウ連峰と並び、その間には長大な南北2本のイニリチェク氷河が走っている。

子午線連峰は南端の軍測量技師峰(6873 m)で東西に走る長大な山脈と接続するが、東へハリクタウ、西にコクシャルタウと異なる名称の連峰が分岐する。国境はここで直角に西に折れ、後者に添って走ってゆくが、その山稜上に天山山脈最高峰のポペーダ(7439 m、中国側呼称トムール)がそびえている。

南イニリチェク氷河は全長は60 km、天山最長で、支流も特にコクシャルタウ側に長く食い込み、懐の深い氷雪領域をなしている。

イニリチェク氷河を南北に分



ポペーダの稜線からテングリ・ターグ連峰を望む。ハンテングリのピラミッドが見事だ
眼下に広がるのは南イニリチェク氷河の支流、ズベズドーチカ氷河



ハンテングリ途上から北イニリチェク氷河対岸の
サリジャス連峰を望む

けているのが、かつては天山の最高峰と思われていた鋭鋒ハンテングリ（長らく6995mとされてきたが、1988年ごろに7010mと改定された）を擁するテングリ・ターグ連峰である。

そして北イニリチェク氷河を挟んで一番北に走るのが、前2者と比べれば低いが氷雪に覆われたサリジャス連峰である。

ちなみに、世界最高峰エベレストはおおむね北緯28度に位置するのに対してポペーダは北緯42度にある。こ

れを日本に当てはめれば奄美大島と函館ほどの違いがある。ポペーダは登攀ルートも長大で、旧ソ連アルピニストがよく8000m峰に匹敵する7400m峰と呼んでいたが、気圧はともかく、気象条件が厳しいことは理解していただろう。

NO LIMIT

限りなき山行

8

写真・文
近藤和美

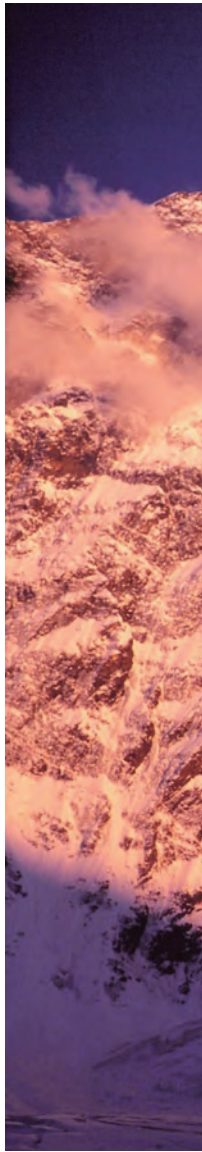
中央アジアの高峰〈8〉

中央天山への入り方

今回は中央天山核心部への入域方法についてお話ししたい。

なお、もちろん中国・新疆側も登山対象であり、トムール（ポペーダ）にも過去複数の日本隊が挑戦しているし、JAC東海隊が4度の挑戦の末に初登頂した雪蓮峰（6627m）などもある。アプローチが難しく探検的要素も含んだ遠征本来の楽しみを得られる地域ではあるが、近年の中央政府によるウイグル抑圧政策の状況下では、活動はより不自由になっているのではないかということと、私自身そちら側は未訪問なので、ここでは旧ソ連圏のキルギスとカザフスタン側について紹介する。

前号と今号の掲載地図を合わせて参照されたいが、南イニリチェク氷河は全域がキルギス領なのに対して、北イニリチェク



氷河側は北西から伸びてきているカザフとの国境が源流部を横切ってハンテングリの頂上に達していることが分かる。

つまり、北イニリチュク氷河を遡ると、目に見える境界線があるわけではないが、突然カザフ領内に入ることになる。例えるなら、秘境で有名な秋山郷の中津川流域は大部分が新潟県に属しているが源流域は長野県であるとか、東京の川というイメージの強い多摩川も源流域は山梨県に属するというような感じだろうか。

両国ともソ連時代は境界を気にせず行き来できたが、現在は独立国同士なので国境管理もある。ただ、昔からのつながりもあるので、EU域内往来ほどの自由さはないものの、通常の国の出入国管理のような厳しさはなく、緩やかである。

出発地はアルマトイ（カザフ旧首都）またはビシュケク（キルギス首都）のどちらかになる。

両国ともに現在、日本人は入国時に前者30日間、後者60日間の滞在許可を得られる。カザフ側で登山する場合は日数不足になる可能性があるのでビザを取得して行くのがよいが、主にキルギス側で登山して山中で日数限定的にカザフ側で活動する手法は採れるかも知れない。なお別途、辺境地域に入る許可証（Peropusk）が必要だが、どちらの国にも登山トレック代理業者が複数あり、そのどれかを選んで諸手配を依頼することになるし、上記手法の可否や滞在延長についても相談できよう。

どちらを起点にしても陸路で中継拠点のカルカラ（2200m）まで1日かけて走る（例えばビシュケクからだだと460km）。

気分の良い草地の中継地だが、実は真ん中を流れる小川、カルカラ川が国境になっていて、橋を渡るにも簡単な検問がある。

天山山中に行くにはここからヘリコプター利用となるが、40〜50分の飛行でいきなり4000mの氷河上に下ろされるので高山病に陥る恐れは否めない。

できれば余裕ある総日程を確保したうえで、ここに数日間滞在して近傍のカルカラ峰（4059m）辺りで順応を図っておくことを勧めたい。私は89年から3年続けて中央天山に入り、毎回のカルカラ滞在中で周辺の地理地形を把握してプレ順応に役立てた。実際その効果は大きく、BC入り後に不調になった隊員は僅かだったが、不調者が多く出た隊を目にしたのも事実である。カルカラでのプレ順応についてざっと説明しよう。カルカラ



これなあに？ カルカラの草地には放牧の羊や山羊のために岩塩の塊が積まれていた

限りなき山行

ヘリコプターの機窓から
メルツバーヘル湖と南北
イニリチェク氷河合流点
方面を望む



カルカラ近傍
ピークからは南
の空に天山山脈
の雪嶺が連なり
圧巻だ



カルカラ後背の
山地に咲く黄色
いケシの花

のカザフ側から本流を離れて左
上する小道に入り、小尾根を乗っ
越して支流に下りる。その小沢
沿いに遡ると、やがて樹林帯を
抜け出し、辺りはイエローポピー
の群落など、目も緩なお花畑が
広がる。水源近くまで登り、キャ
ンプ地を定めよう。

ある。ここまでで引き返しても
順応的には十分だが、進むなら
一通りの登攀装備と、帰途にも
う1泊できる用意を整えて臨み
たい。

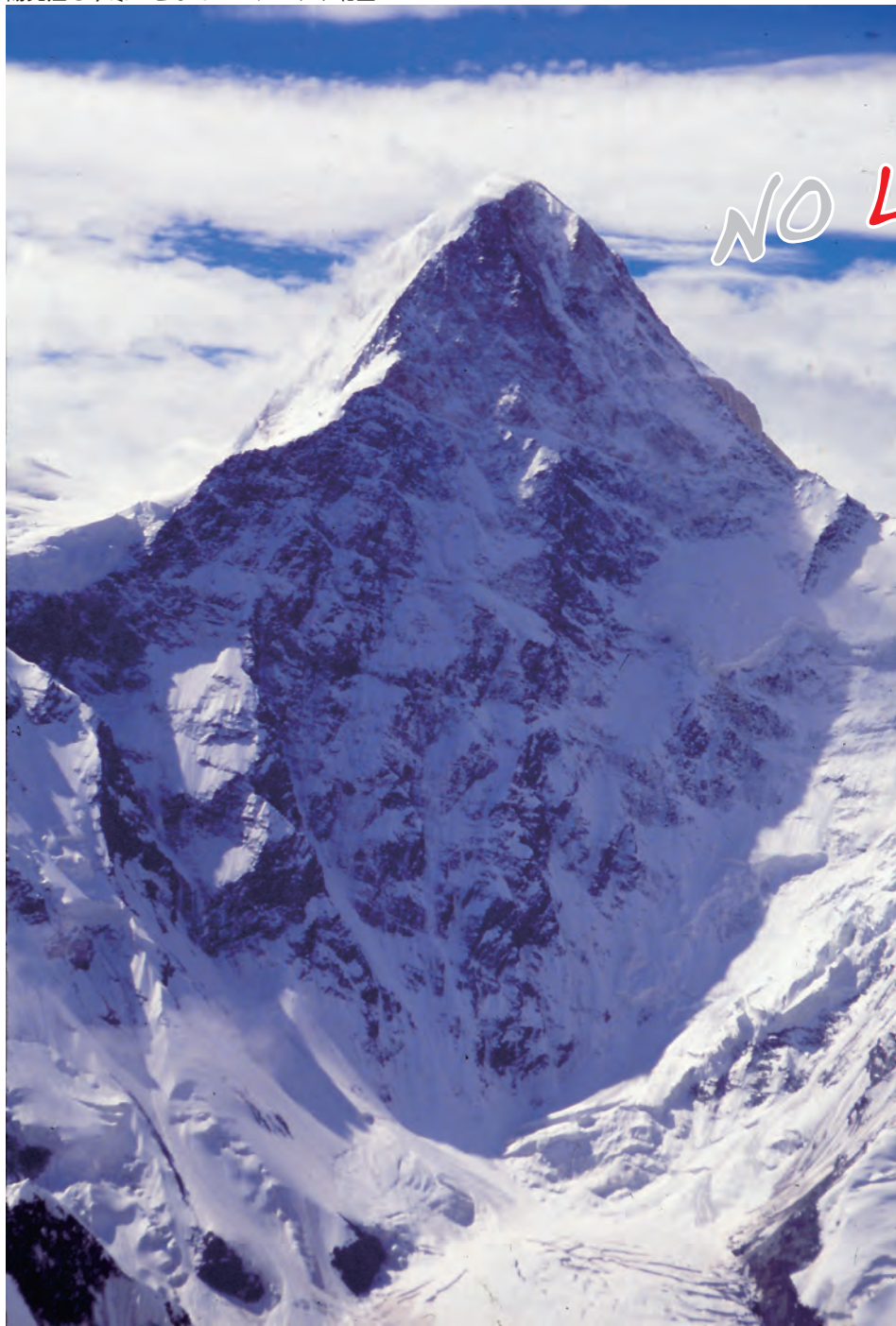
さて、カルカラからいよいよ
ヘリで100km余りをひとつ飛
び。89年は北イニリチェク氷河
BCに運ばれた。

翌日、斜面を登りつめて稜線
に出ると、昨日の沢の源頭の3
800m前後
のピークに立
つ。晴天なら
ば南東遠くに
中央天山の高
峰群が、さら
に南西へと高
度を下げなが
らも白銀の山
嶺が果てしな
く連なってい
て壮観だ。

前方に雪を
戴いたカルカ
ラ峰が望める
が、途中には
険しい岩峰が

間もなくハンテングリ北麓の水
河上のBC地に着陸する。

南北イニリチェク氷河の合流
点上空に差しかかり、北イニリ
チェク氷河側に入るとすぐ、谷
幅いっぱい水に水が湛えた青く大
きな水面が広がる。20世紀初頭
にドイツ人探検家、G・メルツ
バーヘル隊が遭遇して見出され
たメルツバーヘル湖である。北イ
ニリチェク氷河からの融氷水が、
より長く広大な本流・南イニリ
チェク氷河の厚い水体に堰き止
められて貯水されているのだが、
非定期的に決壊しては再湛水す
るという不思議な氷河湖という。



NO LIMIT

限りなき山行

9

写真・文
近藤和美

中央アジアの高峰（9） サリジャス連峰の山やま

カルカラからのヘリコプターが登山者を下ろす北イニリチュク氷河上のBC地（4000m）はハンテングリを真正面に仰ぐ素晴らしい立地だ。3000mという圧倒的な高度差でそそり立つハンテングリはあまりに近く、その仰角は凄まじい。その北壁は日照に乏しく暗い色を呈した垂壁を威圧的に曝している。登攀対象として容易なものではないことは一目で誰にも理解できる岩壁だが、ソ連時代のクライマーらによって、少なくとも6本以上のルートが拓かれている。

30年前から西側登山家にも開放された中央天山



だが、その後この壁に挑んだクライマーはいないようだ。新ルートを開く余地は少ないかも知れないが、腕に覚えのあるクライマーなら挑戦し甲斐のある対象ではないか。

BCは氷河中央モレーン上に設けられ、パミールキャンプ同様、複数の民間会社によって2人1室のゆったりテント、食堂大テント、調理、医務、発電装置などが用意され、充実している。

さて、ハンテングリへの登頂ルートだが、一般的にはもちろん北壁は対象にならない。東西の科尔を目指すラインもセラックや懸垂氷河に防御されていて危険極まりない。

ハンテングリの初登頂は1931年に南側から為されたが、北側からの通常ルートは、西に隣接するチャパーエフ北峰を経由する大回りのルートが採られる。これとて急峻な岩壁が複数箇所存在するなど、けっこう厄介で骨が折れるルートである。

もちろん高度順応のために、荷揚げを兼ねてこのルートを上り下するのも良いが、実は北イニリチェク氷河を挟んで対峙するサリジャス連峰側で初期順応を図るのも、体力消耗を抑えるだけでなく、対岸の高みからハンテングリを始めとしたテングリターゲット連峰のパノラマを楽しむので推奨できる戦術である。

最も取り付きやすいのはBCの背後に位置するセミョーノフとバヤンコルの間を流下して北イニリチェク氷河に合流していく支氷河に入って、アジーンナツアチ峰を目指すものである。なお、天山も温暖化の影響で氷河は溶融傾向で、往時よりも歩きにくくなっているとのことである。

支氷河に入って谷幅が狭まった両側からの雪崩警戒地帯を通り過ぎた4700m辺りがキャンプ適地になる。

キャンプ地から氷河を詰め登ると、サリジャス連峰上の科尔(5050m)に飛び出す。左へ

限りなき山行



行けばアジーンナツァチで、最初の東峰までは容易な雪稜登高で到達できる。この先、中央峰を越えて主峰へはやせた雪稜続きとなり、気を付けて進みたい。一方、コルから右へはより魅力的なバヤンコルがあり、89年

には当初これを目指した。登頂するにはキャンプを主脈上に上げたほうが良いが、コルはやせた雪稜でテントは張れない。コブを一つ越えた次のコルは広く、絶好のキャンプサイトとなる。コルからすぐ急な岩稜・雪稜・



バヤンコルを目指して



サリジャス連峰上のキャンプサイト



ベースキャンプ目指して下山する

雪壁が続く。5400mぐらいでいったん傾斜が緩み、わずかに下った先は尾根の形態が消えてセラック帯が立ちほだかる。氷塔の間を抜けて行けそうに見えたが、我々

がその下に近づいたまさにその時、セラック帯を先行していたチェコ隊が突如発生した雪崩に流される場面に遭遇。結局1人が死亡する事故となり、我々も登高を断念したのだが、雪質を見定めたうえで是非トライしてみたいピークである。

6400mの標高はブレ順応というより独立した目標たり得る対象だろう。欄外に示したURLでは北イニリチェク側からの登攀ラインが示されているが、サリジャス連峰の北側、バヤンコル川畔にBCを設けて登るのが一般的のようだ。

天山もパミール同様、7、8月が登山適期であり、今年ももうシーズンは閉幕したが、来年以降の遠征目標に加えてみてはいかがだろう。

北イニリチェク氷河を眼下にして北峰北東稜に登る



NO LIMIT

限りなき山行

10

写真・文
近藤和美

中央アジアの高峰〈10〉

ハンテングリ北面 ソロマトフ・ルート

北面からのハンテングリ通常ルートは1974年に拓かれたソロマトフ・ルートで、31年に南面から初登頂されてから実に43年も遅れてのことである。

この山には南北合わせて10数本のルートが拓かれているが、総じて北側の開拓は遅れた。19世紀から20世紀前半まで中央天山の内奥へ入るには多数の驛馬・ポーターを雇っての苦難のキャラバンが不可欠だった。推測するに、入り口をメルバーヘル湖で扼（扼）されている北イニリチェク氷河側は、南側より取り付き難かったのではないだろうか。



サリジャス山脈・アジーンナツァチから望む



しかし第2次大戦後はヘリコプターによる入山が一般的になり、北イニリチェク氷河側の登攀も活況を呈したと思う。

ソロマトフ・ルートはちょうど30年前、初めて西側登山者に開放された1989年に、私が労山高所登山学校（先発）隊を率いて日本隊初登頂を果たした際に登ったルートで、登路はハンテングリの西隣、チャパーエフとの中間に位置するチャパーエフ北峰（※1）の北東支稜伝いにたどるものである。

現在では名峰ハンテングリを

目指す多くの登山者を迎え入れるために、エベレストやアマダブラムなどと同様、公募会社ガイドらによって固定ロープなどルート整備が施されている（※2）。荷揚げは自分らで行うのが原則だが、望むならポーター役の地元クライマーを雇うことは出来る。

北イニリチェク氷河上、北岸寄りに位置するBCを出発し、小一時間かけて氷河を横断。ハンテングリ北壁基部に突き当たる支流に入る。すぐ錯綜するクレバス帯に出迎えられ、通過には細心の注意を払いたい。

ここを右寄りに進路をとって突破し、北東稜末端部に続く雪壁（雪解けが進んでいればガラ場）を登る。

尾根末端の平坦部に上がり込むと、そこはC1地点（4600m）で、夏季は通常乾いたキャンプ地が得られる。BCからは半日行程で、89年には日程の都合でこのキャンプ地を使うことなく、毎回BCからC2に直行した。

※1 近藤が入手した地図には山名の記載がなく、便宜的にチャパーエフ北峰と呼んだが、正規名称かどうかは不明。

※2 温暖化の影響はないようだが、北面なので少ないようだ。近年の登山記録やユーチューブ映像、NHK-BS「グレートサミツ」(平出和也氏) などを見てもルート内容の変化は大きくはないようだ。それより年ごとの相違の方が大きいと思われる。

限りなき山行



ウエストコル下の懸垂氷河が崩壊してルート上を雪崩が襲った（C1 から）



C1 ~ C2 間の岩壁登攀



氷化した雪壁を攀じて北峰手前の岩層帯に差しかかる



北峰頂上からチャパーエフと左遠くに盟主ゴベータを望む

C1からは休む場所もほとんど得られない急傾斜な氷雪稜が延々と続くが、これを高距500mも登ると行く手に岩場が立ちはだかる。

高度差40mほどの直立した岩壁だがホールドは多く、さほど困難ではない。この岩場を右上へ対角線状に抜けると再び雪稜になる。

若干傾斜の緩んだ雪稜が続くが、最上部で急峻な凹状部に導かれる。陽の当たらぬここは硬い氷壁となっていて、ロープがあつても的確なテクニックを要

求される。89年にはまさにここで、後発隊にも同行してその夏2回目の登頂を果たした北沢真一講師が下降時のケアレミスで痛恨の滑落死亡事故を起こしている。

ここを抜け出た所で突然尾根は水平になると共に右折する。少し進むと尾根幅は広がり、C2地となる雪の台地（5500m）に到着する。

C2から再び傾斜を強めた雪壁をつめると、岩層帯に突き当たる。アイゼンの前爪が乗るだけの雪を寄せ付けぬ急な岩場は

苦しいユマーリングを強いる。

やっとこの岩場を抜けてもなお急な雪壁が続くが、それも徐々に緩み、やがて小広いスノードームをなすチャパーエフ北峰頂上（6120m）に至る。（※3）

一気に南側の眺望が開け、ここを北峰と呼んでいいかどうかと思わせるほどチャパーエフまでは距離がある。

北峰を後に、眼下のウエストコルに向かって下る。次第にヤセ尾根となり、200m以上も下らされるとコル（5900m）に着く。

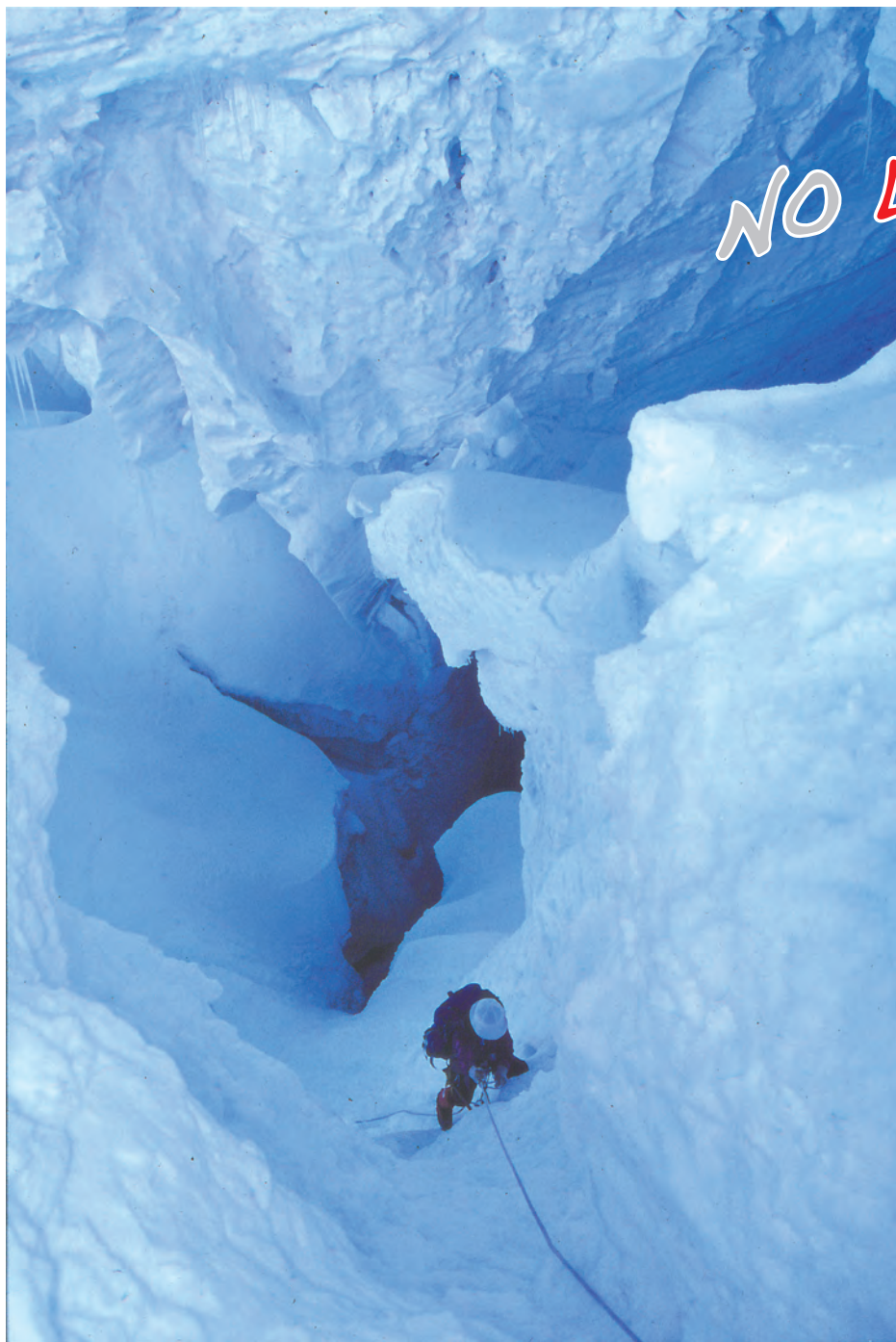
ここから南面に50mほど下りると、通常公募会社スタッフによる大きな雪洞が雪壁に掘られているC3地で、テントは斜面を棚田状に切り開いて設営する。

また下降点からそのまま雪稜を進むと雪原状に広がってきて、吹きっさらしだがテント場に困ることはない。（※4）

その先からいよいよハンテングリ西稜の登攀が始まるが、それについては次回にゆずりたい。

※3 この北峰直下の雪壁は大雪の後には雪崩の危険がある。1989年には先発隊がハンテングリに登頂した夜から大量降雪となり、往路を下るのを回避して南面初登ルートに下り、同峰南北横断という形になった。

7 ※4 ソ連時代に出された解説書『ソ連の5大高峰』所載のルート図を見ると、初登時にはC2台地から北峰の山腹を大斜上トラバースしてハンテングリのウエストコルに抜け出たようだ。しかし雪崩・落石などの危険性、ルート・メンテナンスの困難性など、技量不足者も含めた大勢の登山者が行き交うには不適当として、現在はチャパーエフ北峰経由のルートが開拓・採用されたものと思われる。



NO LIMIT

限りなき山行

11

写真・文
近藤和美

中央アジアの高峰（11）

ハンテングリ南面 ポグレベツキー・ルート

ハンテングリの初登頂は1931年にM・ポグレベツキー率いるソ連・ウクライナ隊によって南イニリチェク氷河の支流、セミヨーフスキー氷河から西稜に出るルートで果たされた（※1）。北側のソロマトフ・ルートと並んで、南側からの通常ルートとして人気の高い登路となっている。

筆者は1989年から3年続けてこの山に通ったが、最初は北面から登って南面に下山。2年目以後は本ルートを登降したので、なじみ深いものになった。

端的に言うと、氷雪稜や岩場の多いソロマトフ・ルートと比べて相

※1 日本版 Wikipedia「ハンテングリ」の項には初登頂は北壁から、となっているが誤りである。また、同峰が中国・新疆とキルギス、カザフとの3国国境に位置するともあり、中国の小縮尺略地図の表現に添っているが、そうなると中国領は子午線連峰を越えて南イニリチェク氷河源頭に及ぶことになって不自然である。



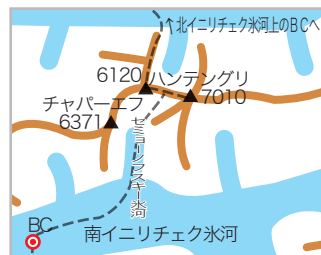
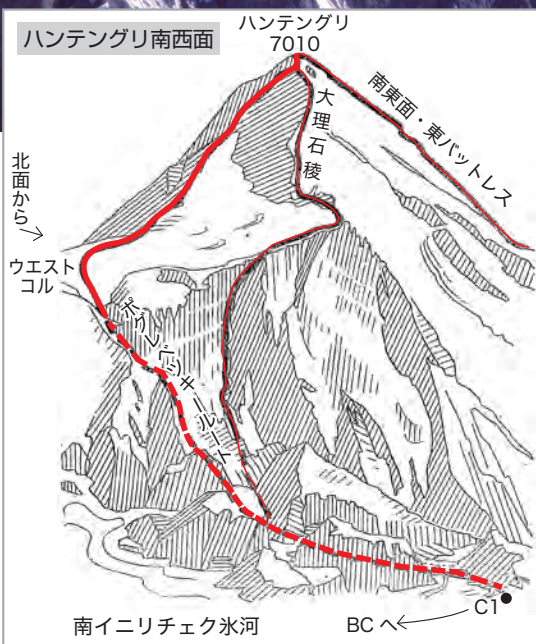
対的に技術的には容易だが、雪崩の危険性は無視できない。筆者も3年間に延べ10数回通過し、初回からその危険性を認識して通過には神経を使った。幸い雪崩には遭わなかったが危険性がかなり高いルートであることは十分認識して、通過時間帯の考慮やスピーディーな通過を心がけたい(※2)。

カルカラからのヘリは南イニリチェク氷河左岸側、大支流ズベズドーチカ氷河の右岸側が合流する付近に設けられたBC(4000m)に運んでくれる(※3)。

BCからは北東に、気高きさえ覚えるハンテングリのピラミッド。その英姿を一際引き立てているのが真正面に切れ落ちている鋭い刃のような大理石稜である。ぜひ誰かにトレースしてほしい。

また真南にはポベードが堂々たる貫禄を示し、南イニリチェク氷河BCならではの一大景観を堪能できる。

さて、ポグレベツキー・ルートへは幅4kmもの広大な本流を上流に向かう。



セミヨノフスキー氷河合流点が近付いたら斜め横断して出合へ。BCから3時間前後の行程で、C1地点となる(4250m)。

C1からセミヨノフスキー氷河に入っていく。次第に傾斜が強まり、斜面上にはこここに大小のデブリも認められて警戒心呼び起こされる。

陽光に恵まれる南斜面は温暖化の影響も受けやすいが、それと共に急傾斜な山腹谷氷河は年

ごとの相違も大きい。私の3年間の経験の中でも、89年と91年は4700m前後に谷幅いっぱいを横切る巨大クレバスがあつて、通過に苦労させられたが、90年はそのようなクレバスは全

※2 このルートでの雪崩遭難例は数多く、特に1991、1993、2004年には多数の犠牲者が出た。その中には卓越した高所クライマー、V・フリシチャーティーらも含まれている。

※3 南イニリチェク氷河は広大なだけに、BC 展開地は運営主体によって散らばっており、右岸側、ゴリーキー峰寄りに置いている業者もある。

限りなき山行



ウエストコルから仰ぐハンテングリ西稜



のしかかるチャパーエフ東壁を横目にセミヨーノフスキー氷河を行く

くなかった。
左上にはチャパーエフ直下には懸垂氷河が引つ掛かっているのが仰がれる。時々大崩壊を起こし、大遭難も起きているので要警戒だ。素早く通過したい。



岩と雪の難場が延々と続くハンテングリ西稜の登攀

後はクレバス混じりの雪壁を登りつめるとウエストコルが迫る。その直下がC3だが降雪時には気味が悪い。ソロマトフ・ルートと合流するコル(5900m)

大理石稜の末端を右手に見送り、氷河の中間部辺りまで来ると今度は本流そのものがアイスフォール帯になる。これも年によつては垂直の氷壁登攀を強いられ、かと思うとさほど苦労なく突破出来たりしたこともあった。年によって異なるセラック帯の形状次第だが、この前後がC2地点となる(5200m)。初期段階ではC2に泊まらざるを得ないだろうが、順応獲得以降はC1からC3への直行を勧めたい。



右手にボベータを見ながらのハンテングリ西稜の登攀

上に出て幕営してもよい(※4)。コルからいよいよ山頂まで高度差1100mの西稜の登攀になり、おおむね固定ロープが設置されている。通常、未順応領域に入るので往復10〜15時間を要する長丁場となる。未明出発は必須だが、西面のこととて、正午ごろまで日光に恵まれず低温下のユマリーングが延々と続く。

6200mから6400mにかけて数カ所、狭いがテント場が得られる。ここまで最終キャンプを上げられれば時間に余裕が生まれる。途中の岩壁には前号で触れた北沢真一の慰霊板が設置されている(実際の事故地点とは異なる)。雪や氷混じりの急峻な岩稜登攀が続くが、6600m付近でルートは垂壁を避けて右へ、岩溝に斜上。さらに右へ抜けると傾斜が落ちて、後は頂上まで200mほどの雪壁登高だ。帰りも疲れた身体には長い道程となる。秀嶺登頂の感激を味わったら、早めの下降開始をお勧めする。



NO LIMIT

限りなき山行

12

写真・文 近藤和美

中央アジアの高峰〈12〉

ポベータ(上) 西峰北稜經由ルート

天山山脈の最高峰は？

天山南麓に住むウイグル族は昔から一帯の最高峰をトムール／テミール(鉄)の山と呼んでいた。だが北西からは広大な氷雪領域に阻まれて容易に近づけず、遠く離れた地から高く秀麗な姿を望みできるハンテングリが最高峰だと信じられていた。

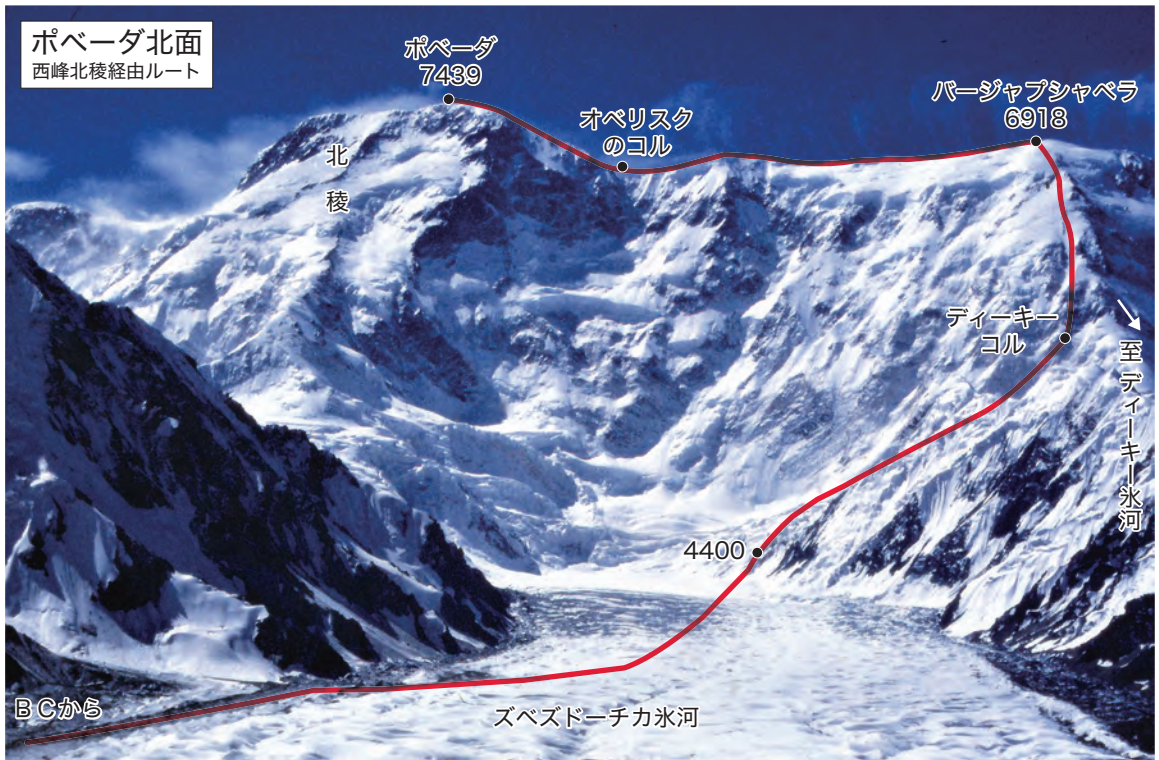
しかし20世紀に入って探検隊・登山隊が「聖域」に入り込み始めるにしたがい、「もっと高い山が南方ある」と言われ始めた。

その確定は1943年、ソ連軍測量隊によってなされ、ハンテングリより400m以上高い山であることが判明したのであった。

第2次大戦後の46年、新発見

のこの山の命名に当たって、一度は軍測量技師峰と呼称されそうになったものの、対ナチス戦勝を記念して勝利を意味するポベータと命名された。一方、仮名の方は近傍の6873m峰に授けられた(※)。キルギス独立後は同じ意味の同国語、ジェンギッシュ・チョクスが正式名だが、登山者・関係者の間ではポベータで通っている。

世界のトップ・アルピニストが精強と認めるロシアやカザフのクライマーからも別格とみなされているこの山は、固定ロープが欲しい難場は多くないが、ルートの長大さや高緯度にある厳しい7000mレベルでの行程の



長さなど、ハンテングリより数段高い総合力を備えていることが求められる。

初登頂は56年にソ連の英雄的登山家、V・アバラコフ率いる隊によって頂上に直登する北稜から果たされた。しかしセラック帯から始まり急斜面が連続するこのルートは幕営地の得にくさ、雪崩の危険性などから、ラッシュで登れるパワーの持ち主以外には恐らく不向きで、その後61年にM・シビリ隊が拓いたバージャブシャベラ（ポペーダ西峰）の北稜経由の登路が通常ルート化した。ただ、その遠征ではディーキー氷河側から取り付いており、

現在採られているズベズドーチカ氷河側から取り付いてもシビリ・ルートと呼んでよいのかどうか不明なので、ここでは副題の名で呼ぶことにした。

筆者も同ルートから90年に西峰まで、翌91年に主峰の日本人初登頂を果たした。いずれも高所登山学校として高峰初心者を率い、先ずハンテングリに登って7000m級の高度順応を得てからワンプッシュでポペーダを目指した。

ポペーダだけを目指すにしても順応活動で日数を要するので、その分をハンテングリ登山に置き換えるのは合理的だと思うが、

ポペーダに向かう時には一切の荷を担いでの出発になる。

ワンプッシュでの所要日数は天候に恵まれれば標準で1週間程度だが、91年には天気待ちを

限りなき山行



ズベズドーチカ氷河を離れて支氷河に取り付く



ヒマラヤ巔が美しいゴーリキー峰
(南イニリチェック氷河から)



支氷河のアイスフォール帯



C1 から望むハンテングリ

アイスフォールの登攀

C4は6000m地点の小雪田か、底状に張り出した岩の陰の狭い場所(6400m)のどちらかとなろう。

(次号に続く)

考慮して12日分を背負った。
南イニリチェックBCを後にズベズドーチカ氷河右岸モレーン伝いにポベータに向かって出発。
徐々に西峰北稜側に移って行く。前にも書いたように氷河の様相は年によって差異が大きい。90年はクレバスでズタズタ、氷河表面は融氷水の大川の徒渉に

も悩まされたが、晴天が少なく低温続きだった91年にはクレバスは少なく、大川の形成もなく、歩行はむしろ楽だった。
ズベズドーチカ氷河本流が大きく左にカーブしていく辺りに主峰の北稜が稜と言うより面という感じで幅広の裾を落としているのが近づく、右手の西峰北

稜下部ディーキーコル方向からの支氷河出合となり、その付近がC1(4400m)地点となる。ここからその支氷河末端のアイスフォール帯を固定ロープ3ピッチほどで抜ける。
上部は緩急混じる雪壁となり、カール状雪原から雪壁を登りきればC2となるディーキーコル(5200m)で、反対側にはディーキー氷河が見下ろせる。

コルから雪稜をたどると5700mのC3地だ。

ここからルートの性質は一変し、中央天山に特徴的な大理石層混じりの岩稜帯となり、おおむね固定ロープの登攀になる。



NO LIMIT

限りなき山行

13

写真・文 近藤和美

中央アジアの高峰〈完〉

ポベータ(下) 国境稜線を行く

5700mからおおむね岩稜帯が続くが、極端に難しくはない。

6750m付近で岩稜は終わ

るが、最後の最後に急な壁となり、上端は手がかり乏しいクラックとなって重荷での乗っ越しは固定ロープの助けがあっても苦しい。

後は幅広の雪稜を登りつめるとコクシヤルタウ連峰の一角、ドーム状のバージャブシヤベラ(ポベータ西峰)頂上だ。眼下は

るかに新疆側の大地が広がり、背後の白い世界とは対照的だ。

頂上で左折し、すぐにC5地点の窪地(6900m)となる。

ここまで各キャンプ地の間隔は比較的短い。体力と高度順応が十分なら一つ置きに進んで来ること可能である。

西峰からポベータ主峰往復には丸1日の好天が欠かせない。リーダーには的確な気象の読みと、行くか待つかの判断力・決断力も求められる。

西峰を後にキルギスと中国の国境稜線を東進する。馬の背ならぬカバの背のような広い雪稜で難しくはないが、その両外側は急峻に切れ落ちている。

片道4km弱の7000m近い





ポベータ日
本隊初登
頂！同行
のカザフ・
クライマー
と共に



ポベータ頂上から南面トムールス氷河を見下ろす

オベリスクの科尔。主峰まで高差 500 m の登りが待っている



稜線は筆者が行動した時はよくクラストしていてラッセルの労はなかったが、もし深雪状態だったら非常に苦しいアルバイトを強いられよう。

緩やかな起伏の稜線歩行が続くが、やがて下り勾配になると中国側の雪壁をトラバースするようになる。スリッパせぬよう要注意だ。

下り着いた科尔の向こう側左手に 50 m ほどの岩塔が突っ立っているように見え、オベリスクと呼ばれる。高度は C5 とほとんど変わっていない。ここ

まで進んで来て、なお高度差 500 m の登りが待っており、より確実を期してこの科尔に最終キャンプを置く隊もある。ただし、その場合は悪天候に見舞われると身動きできず、この隔絶環境に閉じ込められることにもなり、山頂アタックの起点をどこにするかは難しい判断だ。

科尔から初めて本格的な登りが始まり、オベリスク右横の雪壁から岩と岩の間を抜けて雪稜

に出る。

雪稜から岩峰にさえぎられて中国側の急な雪壁を斜上する。

再び尾根に戻ると次第にやせてくる。

短いがかなりのナイフエッジを通過すると傾斜が緩んできて頂上は近い。

ほぼ水平な頂稜にいくつかの高点があり、北稜が突き上げてくる辺りまで進めば待望のポベータ登頂となる。キルギス側に雪庇が出ているので、てっぺんには立たぬのが無難であろう。

1991年8月14日、筆者はポベータの頂上に立った。この登頂でソ連（当時）の5大高峰すべてに登ったことになり、89年のハンテングリ登頂で特例的に得ていたソ連山岳連盟制定の「雪豹」称号をより完璧なものにした。もっとも、ソ連はこの4ヵ月後に解体してしまったので、私は最初にして最後の、そして唯一の西側（非ソ連・東欧圏）雪豹アルピニストということになった。（※1）

※1 ソ連解体後、5座は中央アジア3ヵ国（タジキスタン、キルギス、カザフスタン）に分布することとなったが、その後私の知る範囲では林雅樹、品川幸彦、田部井淳子諸氏が5座を極めている。



登頂を終えて頂稜のやせ尾根を帰る



茜色に染まるハンテングリ（左端）に追い立てられるようにC5を目指した

北側にはハンテングリを筆頭に重畳たる中央天山の山並みが広がり、南を見下ろすと新疆側、トムールスウ氷河がうねっている。（※2）

帰日も高高度で消耗した体に長い道程が待っている。特にオベリスクまでの下りには細心の注意を払いたい。

ゴルから西峰へもいくつかの緩い登り返しがあり、疲労と高度の影響が表れてなかなか苦しい帰路になる。

西峰からBCへは2日で下るのが標準である。

視界不良時の下降では尾根が広いだけに固定ロープ上端、岩稜が始まる地点を見出すのに苦労する可能性がある。注意深く下りたい。

今回で旧ソ連領バミール・天山の概説を一先ず終了したい。

本連載では両山域の主だった峰頭の通常ルートの紹介にとどまらざるを得なかったが、それ以外にも魅力的なルートやピークは数多い。これらの山域での登山はヒマラヤ諸国のような政府に納める高額の登山料がないので割安に登れる。ぜひそれらにも目を向けてアタックしていただければと願っている。

※2 中国・新疆ウイグル側からは1977年に中国隊が雪崩に脅かされながらも登頂を果たした。日本隊では86年に女子登攀クラブ隊が初挑戦したが、雪崩で重傷者が出て敗退。その後、横浜市大隊が90年（雪崩で3人行方不明で敗退）、92年、94年と連続挑戦したが、アプローチの困難さ、ルートの危険性などで、いずれも成功していない。



黎明のモスクワ峰

NO LIMIT

限りなき山行

14

写真・文 近藤和美

パミール・天山概説余談

昨年1月号で本稿の連載を始めてから前号まで旧ソ連領中央アジアに属するパミール山群と天山山脈の高峰について紹介させていただいた。

連載を始めるに当たって、編集部からは「せっかくの中央アジアの高峰群が近年等閑視されているように感じられる。全体を語るのは日本では近藤さんしかないから連載スタートのテーマは是非それで」という要請を受けた。

とは言え、確かに私は両山域に計7回通い、5大高峰の完登者ともなったが、それらの活動は1984年から96年にかけて30年前後も昔のことである。果たして今の私に語れる資格があるのかなと自問もしたが、最終的に要望に応じた次第である。

だが、実際に連載を始めると、

この間の温暖化によるルート状況の変化はどうかと気になった。また地理や登山・探検史についても、うる覚えな知識はあったものの、それをそのまま書くわけにはいかない。そして、最も気を使ったのは入山方法の変化であった。

私が通っていたのはほとんどがソ連時代であり、その崩壊後、各自治国が独立して自由主義経済に移行した結果、登山隊受け入れも商業ベースとなった。

そのため、最近の登山事情を盛り込むべく、近年これらの山域に入った数少ない日本隊の記録を漁ったが、参考になる記述がなされている記録は少なかった。

それよりもさすがインターネット時代。ネット検索でいくつもの山域紹介サイトや有力な受け入れ団体／代理店のウェブサイトに巡り合った。ただしそれらのサイト



ラインホルト・メスナー氏来たる（88年のパミール国際キャンプ開所式に招かれて）



1984年、コルジェネフスカヤC1にて。右端のネ氏（バイカル湖畔在住）から昨夏35年ぶりに便りが届いた。新たな交流の予感！

は多くが英語やロシア語であり、その解説には多大な時間を費やし、しかも掲載スペースの関係で大半は反映できない知識となった。それでもそうして得た多くの知見は私にとって新発見・再認識が多く、労苦ばかりではない楽しみも与えてくれた。

ともあれ、再確認できた知識や新たな知見の一端を出来るだけ盛り込んだつもりである。

他にも、読者の理解を容易にするべく、概念地図・スケッチ類の作成にも意を砕いた。

もう一つ多大な時間を費やしたのが文章に合わせて掲載する写真の選択作業であった。私はもともと比較的山岳写真、それも単なる風景ではなく、クライマーを配した作品に自信がある方である。ただし、現今全盛のデジタルカメラ撮影ならデータを即パソコンに移してモニター上での作業に移れ、一覧性もそこからの選択も本当に楽だが、当時はフィルムカメラ時代。1遠征で1000枚前後も撮ったカラスライドの山を引っ張り出して1枚1枚ループで確認しつつ、候補を多めに選んで、それを自宅のスキヤナーでフィルムス

キャンしてデジタルデータに変換。ここまでやってようやくパソコンモニター上での選択作業に移れるという流れであった。

まあ、そうして選んだ写真もスペースの関係ですべては載せられず、掲載できた写真も多くは小さく扱わざるを得なかったのは、ちよつぱり残念ではあった。ただし、時報全体の限られたページ数の中で毎号カラー3ページを割いて下さった編集部には感謝するほかない。

そのように努めた結果、単なるルート紹介にとどまらない地理・歴史にも触れた読み物に出来たのではないかなと、多少の自負は抱いている。

今回は本連載のメインタイトルを『NO LIMIT』と名付けた理由についてお話ししようと思っていたのだが、その前段で「中央アジアの高峰」シリーズ執筆の経緯と裏話を書き始めたらそれでスペースが尽きてしまった。

パミール・天山の概説執筆に当たっては、高所登山学校の行動詳

報を寄稿した当時の登山時報への寄稿文を読み返し、個々の隊員の動きやソ連や各国登山家との交流など、忘れかけていたエピソードを呼び醒まされた。40〜50代だった当時の自分が相当強い高所クライマーだったことを懐かしく想うと共に、直近の昨秋に登ったアマダブラムではいささか無様な登山となり、体力の減衰を痛感させられた。その登山についても近く述べさせていただきたい。



ハンテングリ目指して南イニリチェク氷河を行く。手前はチャパーエフ峰